ご挨拶

勝央美術文学館長　神田寿則

当館の顕彰する作家 岡本綺堂は、岡山県勝央町出身の出版人 岡本経一の養父であり、新歌舞伎などの劇作家、また「半七捕物帳」などの推理作家として広く知られていますが、怪奇小説の大家というもうひとつの顔も持っていました。

かつて綺堂の養嗣子 岡本経一が尽力し設置されていた「岡本綺堂賞」の志を、当館が引き継ぐべく企画した「こども怪談コンクール ぷちぶちこわい話 ―僕らは最高に怖い話を作ってしまったかもしれない―」は、令和四年度 勝央美術文学館 特別展 岡本綺堂生誕一五〇年記念展「奇譚の神様」の開催を機に、子ども時代から怪談を愛した綺堂になぞらえ、全国の小中学生の皆様から「こわい話」を募るコンクールとして生まれました。

初開催のコンクールにも関わらず、全国より多くの子どもたちから作品をお寄せいただくことができました。この作品集では、小学校・中学校それぞれの部から選考を重ね選出された入賞作品を、一〇点ずつ集録しております。子どもたちの溢れる想像力や独創性、そして彼らが綴る恐怖を味わっていただければと思います。

最後に、ご応募いただきました皆様にお礼を申し上げますとともに、お力添えをいただいた学校の先生方や、ご家族の皆様、審査にご協力いただいた本町教育相談員の皆様、特別展のご監修とあわせて、作文の最終審査をご担当いただきました東雅夫様に厚く御礼申し上げます。

選評

東雅夫

〈ぷちぶち怖い話〉コンクールに御応募いただいた、すべての小学生、中学生の皆さん、お疲れさまでした。最終選考にあたった私も、どんな作品が寄せられるのか愉しみにしていましたが、予想した以上に達者な書きぶりの作品が多くて、驚かされるとともに、大いに愉しんで拝読いたしました。

今回の公募は、日本怪談文芸の偉大な先覚者として、明治・大正・昭和の三代にわたり活躍した岡本綺堂先生の生誕一五〇年を記念して開催されたものです。綺堂先生は、誰にも分かりやすく親しみやすい言葉を、細心の注意を払って選りすぐり、思わず身の毛がよだつような恐ろしい物語を、数多く生み出しました。そこには、大好物だった〈うなぎ〉や、熱心に蒐集した〈人形〉たち、病いを癒すために通った〈温泉〉、常に敬愛の対象だった〈肉親〉など、綺堂先生が好んでいたものたちが、しばしば登場します。

そう、真に恐ろしいものは、その根底のどこかに、〈愛〉が潜められているのです。

今回、私は、いわば綺堂先生に成り代わって、先生が生きていたら選びそうな応募作を選んでみました。どうか貴方も、それぞれの作品の奥底に秘められた〈愛〉の姿を、見つけ出していただきたいと思います。